

書評と紹介

佐々木啓著

『「産業戦士」の時代』

——戦時期日本の
労働力動員と支配秩序』



評者：大門 正克

本書評の最後の【書評一覧】に示したように、『「産業戦士」の時代』については、すでに多くの書評が掲載されており、内容についても丁寧に紹介されている。

ここでは、通常の本評のかたちを以下のように変更することにしたい。本書の概要と特徴を簡潔に示し、ついで各書評で出された論点に学び、さらに評者自身も本書や各書評に関連する史料を読み直すことで、本書評の論点をあらためて明確にし、そのことで、「戦時期日本の労働力動員と支配秩序」をめぐる討議に加わり、さらに議論を進めるように尽力することである。

本書の概要と特徴

本書は、序章、第Ⅰ部、第Ⅱ部、終章で構成されている。序章では、「職工」や「工具」に代わって戦時期に使われた「産業戦士」に注目するとし、「産業戦士」の労働力動員にあらわれた「強制」の契機だけでなく、「同意」を通じた支配＝大衆社会統合のあり様に照準をあわせて考察するとする。序章では、ついで、戦時労働力動員と労働者統合、戦時期の国家体制

の理解、民衆の戦争体験をめぐる先行研究が検討され、そこから本書では、労働力動員の政策と「産業戦士」の「労働・生活の実態」の関係性を考察し、そこにあらわれた「戦時期日本の支配秩序とそのダイナミズム」の解明を課題にするとする。

序章につぐ第Ⅰ部と第Ⅱ部の構成には、本書にこめられた著者の意図がよくあらわれていると思えた。本書では、第Ⅰ部で「労働力動員政策の展開」を検討し、第Ⅱ部で「経験としての「産業戦士」」を考察する（傍点一評者）。第Ⅰ章から第Ⅳ章までの第Ⅰ部では、労働力動員政策と労資関係、青少年「不良化」対策、国民徴用援護事業を対象にして「政策」が検討され、第Ⅴ章から第Ⅶ章までの第Ⅱ部では、生産漫画、徴用日記、敗戦前後の労働者統合を題材にして「経験」が考察されている。

本書を読むと、実際には第Ⅰ部の「政策」のなかに「経験」に関連する叙述があるので、「経験」をめぐるのは本書全体を通して理解する必要があるが、著者自身、序章で、「民衆と戦時体制の関係」は、「あくまでも生活・労働を軸とする主体の経験に即して叙述」する必要があると述べているように（15頁）、本書は「産業戦士」をめぐる「政策」をふまえて「経験」を考察するものであり、とくに「経験」に刻まれた「同意」の契機を読み解こうとするとところに特徴がある、と評者は受けとめた。

多くの書評で指摘されているように、本書の重要な方法として「同意」および「大衆社会統合」があるが、それと同様に「経験」もまた本書を読み解く大事な視点である。評者自身、「経験」に視点をおいて戦時期を考察してきたこともあり（[大門2019]*など）、本書のよう

に「政策」と「経験」を対比させ、「経験」の次元で戦時を考察・総括する意図はよく理解できる。以上より、本書をまとめてみれば、「産業戦士」の「経験」のなかで「同意」を考察したものとなる。

今までの書評の論点

今までの書評での論点を整理すると以下の4点になる。①「大衆社会統合」および「同意」の理解 [町田, 松田, 山本], ②「産業戦士」の位置づけ [市原, 町田], ③女性・ジェンダーをめぐる論点 [榎, 小野沢, 新川], ④「経験」の理解 [大串] である。

書評で④の「経験」をとりあげたのは [大串] だけだが, [大串] も評者も「経験」は本書の重要な論点であると認識しているので, 以下では, 「本書の概要と特徴」と「今までの書評の論点」の両方をふまえ, 次の順番で論点をとりあげる。

まず [1] 「経験」について考察し, 「経験」とのかかわりで [2] 「産業戦士」および女性・ジェンダーをとりあげ, 最後に [3] 同意に言及する順番である。

本書評の論点 (1)

— 「経験としての「産業戦士」 [1]

著者は, 終章において「民衆の戦争体験をどう捉えるか」を総括している。そこでは, 戦争体験の理解は, 「自らが直面する状況のなかで記憶をたどり, 体験を位置づけ直そうとする過程で構築される」(305頁) ことに留意する必要があるとして, 第Ⅱ部をふまえ, 「民衆の戦争体験」は「何よりもまず生存の危機の体験」として「当事者たちに選び取られた」と総括している。著者がそこで留意するのは, 人びとが「理念」と「実態」を「しばしば乖離したものとして認識」していることである。

この評価は, 本書の第6章・第7章を軸に整理されたものである。第6章で著者は, 6名の男性徴用工の個別的史料(日記・記録類)を相互比較し, さらに個別的史料と一般的な史料(統計・調査)を往還することで, 個別的史料の限界を乗り越えようとした。日記の分析を通して著者は, 「大きな物語」の醸成と崩壊の「経験」を見通す。徴用工は, 「決戦」への自覚と「産業戦士」の「名誉」という「大きな物語」を受けとめ, 「苦しさを耐え抜こうとしたが, 「大きな物語」は, 職工の「不良化」などの現実の労働環境と理念のあいだの落差や, 食糧不足と空襲という戦争末期の状況のなかで最終的に崩壊した, というものである(245-249頁)。加えて第7章では「戦争体験」に留意し, 敗戦直後には総力戦の動員への反発と「権力への不信は最大限に高まった」とした(306頁)。

第6章・第7章を軸にした議論は, 戦時期の「経験」にとってたしかに重要だが, 「経験」の視点に留意した本書全体の読後感からすると, 評者は本書からあと2つ, 重要な「経験」を受けとめた。1つめは, 生産漫画を考察した第5章や第Ⅰ部で指摘されているものであり, 都市／農村, 消費者／生産者, 職員／工具など, 戦前・戦時社会にあった「二重構造」を批判し, 克服しようとした「経験」である。2つめは, 政策を論じた第Ⅰ部で論じられているものであり, 青少年工の不良化対策や国民徴用援護事業で動員された「自由主義」批判と「家庭」の役割である。2つめは, 直接の「経験」として議論されているわけではないが, 戦時下の「経験」に何らかの特徴を刻んだことが想定されるものである。

「産業戦士」をめぐる「大きな物語」の醸成と崩壊だけでなく, 「二重構造」への批判と克服, 「自由主義」批判と「家庭」の動員, この

3つが本書の「経験」として大事であり、本書には3つの複合のなかで戦時下の「経験」を考察すべき豊かな論点があると受けとめるべきではないか。

第6章には、本書にこめた著者の意図がもつともよく反映しており、評者はこの章で本書発刊の意義を十分に認めることができた。と同時に、第6章からは歴史的想像力をさまざまに刺激された。それは、本章での戦時期の「経験」が主に日記を書いた男性個人に集約され、「大きな物語」との関連も、もっぱら男性個人の心情に即して議論されていることにかかわる。第6章で「経験」を問う地平を広く見渡すと、次の2つが視野に入る。家族との関係と、「産業戦士」のイデオロギーおよび男性性についてである。

家族との関係をめぐり、第6章の6名の男性徴用工のうち、既婚者は5名であり、そのうちの4名には子どもがいた。未婚者1名も父母弟妹と家族を構成していた。6名は、いずれも家族と離れ離れになって徴用工として働いた。仮に、著者のいう「大きな物語」の変遷があったとして、本書からはそこに家族の気配を感じることは少ない。だが、はたしてそうなのか。

試みに著者が活用した6名の個人史料のうち2つを入手できたので読んでみた。丸山波路と竹鼻信三の史料である〔丸山1947〕〔竹鼻1987〕。詳細は省かざるをえないが、2人はいずれも日記に郷里に残してきた家族について書いている。とくに妻と、病気の長女を含めた6名の子どもと離れた丸山の場合には、家族を案じる記述が多く、家族との通信も頻繁だった。ここで評者は日記のなかに家族がでてくることを指摘したいだけでなく、家族との関係が徴用工の生活・労働や意識に大きな影響を与えていたことを指摘したいのである。

丸山の徴用日記の底流には、日々の徴用の労

働への関心と、家族・郷里への強い思いの2つがあった。徴用や戦時社会への不満が日記に書かれることは少ないが、2回ほど、鬱積した不満があふれた個所があった。「一等工員」や「古参」をかさにきた職工への不満が高まったとき、休日の駅前で、「髪をアイロンで赤くちじらせて」、「真赤に唇をそめた二十位の女」を見たときである〔丸山1947：25，60〕。

後者では、「怒りの心がむくむく」とわき、「拳でなぐりつけてやりたい衝動」にかられたというように、丸山の日記には珍しく激した言葉が並び、そのときは「ポロポロと熱い涙がこぼれた」という〔丸山1947：60-61〕。丸山が起伏の激しい感情を日記に書きとめたのは、「吾々（丸山と家族—評者注）の苦しさも悲しみも知らず」というように、駅前の光景と、牛や土地を整理し、妻や6人の子どもを残して、「勝つために徴用に来て働いている」我が身と家族の実情を対比してとらえているからにほかならない。日記には家族が「ちりぢりに別れて」暮らすことへの懸念が2回記されている〔丸山1947：65，71〕。丸山にとって家族は、戦時下の「生存」を支える欠かせないものだったが、徴用と戦争の進行は、その「生存」に大きな危機をもたらした。著者のいう「決戦」と「産業戦士」の意識は、労働環境や戦争末期の状況に左右されただけでなく、家族を含めた「生存の危機の体験」によっても大きく影響を受けたのではないか。

ここからは、第I部の「政策」で動員されたのが「家庭」だったことが想起されよう。第I部の徴用援護事業の検討を通じて著者は、援護拡充の一方で「自立」や「妻」「母」の動員が促されていたこと、援護における国家方針と「地域住民の「生活」の論理」のあいだには「相克」の面もあったことなど、政策の「揺れ幅」にまで目をとめている（140, 177-178頁）。

著者が検討した「政策」に映し出された「家庭」は、徴用日記のなかの「家庭」とつきあわせて検討すべきだったのではないか。そこにあるのは、理念と実態の「乖離」、あるいは大きな歴史と小さな歴史の「乖離」にほかならず、ここから両者の関係の動態的な把握の道がひらかれたはずである。徴用日記に映し出された「家庭」をふまえて、本書の第Ⅱ部と第Ⅰ部をあらためて接続し、戦時下の「生存の危機の体験」を動態的に把握し、戦時下の「経験」の考察を深めることが重要な課題としてあるように思われる。

本書評の論点(2) — 「産業戦士」のイデオロギー

あるいは男性性について [2]

本書の書評において、たとえば [市原] は、戦時期の労働力構成のなかで限られていた徴用を対象にして、戦時期の労働を論じることに疑問を投げかけ、[榎、小野沢、新川] は、本書で今後の課題とされている女性の工場労働や、「産業戦士」の買春の検討の必要性を指摘している。今後の課題としては指摘の通りだと思うが、本書に即したとき、まずは「産業戦士」の含意の検討が必要になると思う。

この点に関して著者は、本書の冒頭で「産業戦士」が戦時下に頻出した用語だったことに注目したのちに、「産業戦士」は「成人男性」の「単性的な構造」をもっており、「産業戦士」に対して女性や少年は、「あくまでも特殊な位置を占めるものと観念されていた」(3頁)と指摘して、「産業戦士」の対象を成人男子に限定している。「産業戦士」の「構造」としては、著者の指摘の通りだろうが、この限定は、職工に代わって新たに登場した「産業戦士」の影響力の考察を狭めることになっており、総力戦の検討として大変に残念だと思う。

このことにかかわって、[大串] は、戦時下

に太宰治が書いた「東京だより」という興味深い文章を紹介している。「東京は、いま、働く少女で一ぱいです。朝夕、工場の行き帰り、少女たちは二列縦隊に並んで産業戦士の歌を合唱しながら東京の街を行進します。ほとんどもう、男の子と同じ服装をしています」という文章である。太宰とともに宮本百合子も「産業戦士」に目をとめていた作家であり、戦時下の旧盆の上野は「故郷へかえる男女の産業戦士」であふれていたとか、「青少年男女の産業戦士」の罹患率が急騰していると書きとめている(宮本百合子「列のころろ」『大陸』1940年10月、『宮本百合子全集』14、新日本出版社、1979年)。

太宰や宮本の観察は、戦時下の社会では男女を含めて「産業戦士」ととらえることがあり、しかも少女たちの「産業戦士」が「産業戦士の歌」を歌いながら行進するシーンに耳目が集まっていたことを推察させる。ここには、「産業戦士」のイデオロギーや男性性をめぐる検討課題が示唆されており、それはまた、戦時下の「二重構造」にかかわる重要な論点のように思う。

この点にかかわって評者はすぐに、1944年、岩手県で学徒勤労動員を受けた少女の日記を思い出した。少女は日記に「待ちに待った動員令」と書き、今まで出征兵士の見送りのときに、「男で有ったならなあ」と何回思ったことか、それが今回、「女子の身としても男子に優るとも劣らぬ生産陣で活躍する事」になった、「ああ時が来たのだ。頑張ろう!!」と書きとめていた [大門 2009: 133]。

ここにみられたことは、先述した、本書の2つ目の「経験」である「二重構造」への批判と克服にほかならない。評者自身は、この課題を、戦時下の民衆総合の「平準化と差異化のあいだに生じた軋轢」 [大門 2019: 17, 傍点一原

文]として議論してきた。戦時下の社会では、周縁におかれた側が「軋轢」を乗り越えるかたちで統合力を強める動きが各所でみられた。本書で指摘された「二重構造」しかりであり、女子の「産業戦士」や勤労働員も同様に統合力の渦のなかにあった。格差や「軋轢」を乗り越えようとするこれらの動きこそ、「戦時期日本の支配秩序とそのダイナミズム」(本書)を社会の基底からつくりだす、総力戦の「経験」の歴史的特徴だったのであり、ここに「経験」のリアリティを探り出す鍵があるのではないか。

[大串]で紹介された太宰治の「東京だより」を読んでみた。印象に強く残るのは、そこに登場する「美しい」少女である。小説家の「私」は、徴用工として働く友人の工場を訪ねた際に「美しい」少女に出会った。少女たちが二列縦隊で「産業戦士の歌」を歌いながら行進する先述のシーンは、3回目の工場訪問のときのことであり、その少女も行進のなかにいたが、少女は歌を歌わずに、松葉杖でひとり列を追っていた。「私」はそこではじめて少女の「足が悪い」と思われることを知った。

「東京だより」をめぐるのは、文学のなかで議論されているが([井原2016]など)、評者がすぐに思い出したのは、『光明の歩み』という戦時下の映像フィルムである。1932年に東京市に設置された肢体不自由児のための公立学校の光明学校は、1942年に国民学校になった。国民学校では、教練まがいの団体行動が強化され、フィルムには、松葉杖を鉄砲代わりに行進する子どもたちの姿が映し出されていた[大門2019:307]。

この映像をはじめてみたときの衝撃は、今でも鮮烈に残っている。『光明の歩み』が映し出すことも、岩手の少女が勇躍して勤労働員に参加したことも、いずれも戦時下の平準化と差異化をめぐる論点にかかわることである。戦時下

の統合力強化のもとで、岩手の少女のように、それに呼応した動きもあらわれたが(平準化)、そこには大きな「軋轢」も生じた(差異化)。「東京だより」もその文脈で理解できるのではないかと思う。

評者がこの書評で強調したいことは、「産業戦士」をめぐるのは、「産業戦士」イデオロギーの統合力に照準を合わせ、統合をめぐる男性性の論点や、平準化と差異化をめぐる論点を検討する必要性があり、その点で本書は、「産業戦士」イデオロギーや男性性の考察にまで視野を広げておく(あるいは開放しておく)必要があったのではないか、ということである。

本書評の論点(3)

—「大衆社会統合」・「同意」をめぐる [3]

すでに紙数がいっぱいなので、最後の論点は一言付すだけにする。

「同意」をめぐる議論を「大衆社会統合」として提示したのは[後藤2001]であり、本書でも序章で[後藤2001]をふまえて「同意」を通じた支配=大衆社会統合の視点が提示されている。歴史研究で後藤の議論をふまえているのは[安田1993]であり、戦中期に「大衆社会への転形」という議論を行っているが、これはあくまでも見通しにとどまっている。評者は後藤や安田の議論に関心をもっているが、「支配=大衆社会統合」をめぐる問題を歴史研究として考えるためには、後藤や安田の議論に戻らざるをえないのが現状であった。それに対して、戦時期をはじめて歴史研究として本格的に「支配=大衆社会統合」として論じようとした本書が登場したことになる。

著者は本書の最後で戦時期の大衆社会統合にふれ、労働力動員政策には大衆社会統合への「契機」が含まれていたが、「なおも本格的なものではなかった」として、「産業戦士」の時代

のモーメントは、高度経済成長の過程で、「企業社会」のなかに吸収・統合され、日本型の大衆社会統合として完成される」(302-303, 310頁)というように、やや急ぎ足で、戦時期と高度成長期の相違点よりは接続面にアクセントをおいて議論を進めている。

だが、本書評で指摘したように、戦時期は3つの大きな論点を複合的に「経験」した時代だったのであり、「経験」をめぐる動態的把握をふまえ、戦時期を大衆社会統合としてどのよ

うに論じることができるのか、著者にはその見通しをぜひあらためて示していただきたい。本書の研究をいかし、さらに大衆社会統合の議論を進めるために、以上の積極的発言を著者に待望している。

(佐々木啓著『「産業戦士」の時代——戦時期日本の労働力動員と支配秩序』大月書店、2019年2月、320頁+iii、定価4,200円+税)

(おおかど・まさかつ 早稲田大学教育・総合科学 学術院特任教授)

*本書評で、著者名・発行年のある文献は【参考文献】を、著者名のみ文献は【書評一覧】をそれぞれ参照されたい。

【参考文献】

- 井原あや (2016) 「閉ざされた声——朗読文学としての「東京だより」」『太宰治スタディーズ』6
大門正克 (2009) 『全集日本の歴史 15 戦争と戦後を生きる』小学館
大門正克 (2019) 『増補版 民衆の教育経験——戦前・戦中の子どもたち』岩波現代文庫
後藤道夫 (2001) 『収縮する日本型〈大衆社会〉——経済グローバリズムと国民の分裂』旬報社
竹鼻信三 (1987) 『徴用日記——戦前・戦後の思い出』
丸山波路 (1947) 『工具橋——徴用工員の記録』栄光出版社
安田浩 (1993) 「総論」『シリーズ日本近現代史』3, 岩波書店

【書評一覧】

- 市原博 (2020) 『同時代史研究』13
榎一江 (2020) 『日本歴史』862
大門正克 (2019) 『しんぶん赤旗』2019年4月28日
大串潤児 (2020) 『民衆史研究』99
小野沢あかね (2020) 『歴史学研究』993 (学会誌での位置づけは「コメント」)
新川綾子 (2020) 『人民の歴史学』223
町田祐一 (2020) 『歴史学研究』993
松田忍 (2020) 『史学雑誌』129 (4)
山本和重 (2020) 『歴史評論』846